

遠隔授業と対面授業、その課題と可能性

コロナ禍から新しい学びへ

金 衿 佳
森 川 慧 子
若 本 夏 美

Abstract

The pandemic caused by COVID-19 has compelled educators all over the world to make abrupt and drastic changes in their classes from elementary school through college. Japan has been no exception. Universities and colleges in Japan transformed their courses from traditional face-to-face to online lessons. This study explores how college students recognized such online lessons after experiencing one semester in 2020 and discusses the advantages and drawbacks of online lessons by comparison with face-to-face classes. The participants in this study were 128 college freshmen of English majors. We administered an originally designed questionnaire of 23 items comprised of a six-point Likert scale and open-ended questions. As the results of descriptive statistics and Kendall rank correlations, it was discovered that there was no significant correlation between the commuting hours and the preferences for online lessons. Instead, significant correlations between learner styles for individual/group-based learning and the preferences for online lessons were found. Blending face-to-face and online lessons is suggested as an implication for future college education to promote active learning and to offer more learner-friendly educational settings.

1. はじめに

“Natural Experiment”とは研究者の計画によってではなく、人知を越えた自然の力によってひきおこされた事象をもとにおこなわれる研究のことを指す。応用言語学だけでなく、心理学や経済学など幅広い領域で試みられてきた研究である。例えば、Tan と名付けられた患者はブローカ失語症(Broca Aphasia)を発見するキッカケとなり、両親から虐待を受けてきた Genie や人間社会から隔絶した環境で育った Victor はともに言語の臨界期(The Critical Period Hypothesis) についての研究に有力な情報を提供することになった。これらの研究はあらかじめ意図的に計画されたものではなく、偶発的な事故や事象をもとにした「自然の実験」の著名な例(Lightbown & Spada, 2013)である。このタイプの研究が重要なのは、通常では研究し得ないからであり、肉体的・精神的に危険性のある実験や調査は、ひとを対象とする研究分野においては厳しく制限されているからである。

2020年2月27日、安倍晋三首相(当時)は突如として翌3月2日より春休みまで全国の小中学校に対して一斉休校を実施するよう要請した。この後、教育現場においては小学校から大学に至るまで校種を問わず、新型コロナウイルス感染症(Covid-19)が1年間にわたり影響を与え続けることとなった。教員に関してもこの影響は甚大なものがあつた。特に日本の大学教員に対してはこの感染症の影響により担当する全てのコースが遠隔授業¹に移行せざるを得なくなり、好むと好まざるに関わらず自分自身の授業を全ての教員が見直さざるを得ない危機的な状況に陥つた。一般的には新型コロナウイルス感染症は児童・生徒・学生の人間的成長、知的発達に負の影響を与えた可能性が高いが、そうとばかりは言いきれない。このCovid-19もまたある意味において教育界における「自然の実験」という側面を持つとも考えられる。

本論執筆時点において、新型コロナウイルス感染症はイギリス型・南アフリカ型などいくつかの変異種が拡大しつつあり、収束するどころか、7月に

開会式を控える東京オリンピックの開催すら危ぶまれる状況下であり、2021年度「正常に」授業が展開できるかどうか不明である。これは日本だけでなく、北米やヨーロッパ諸国においても同様である。しかし、人の記憶は失われやすく、他の経験によって容易に歪められてしまう。この時点において、未曾有の体験をした学生が、2020年度、1年間の授業について、何を考えどう感じていたのかを調査・研究することは、今後の大学教育の方向性を検討する上でも重要な意味を持つと考えられる。これまでFD (Faculty Development) が声高に叫ばれ続けてきたが、本研究を通して今後の大学における授業に対し示唆を得ることができるかもしれない。

同志社女子大学では偶然のことではあるが、春学期は全て遠隔授業、秋学期は一転、ほぼ対面授業の実施となった。このように春と秋で好対照な授業形態となったことは、研究的観点からも比較検討に適しているといえる²。本論の趣旨は、1年に渡ったこの教育形態の総括を学習者の立場から試みようとするものである。

2. 研究の背景と研究課題

コミュニケーションの分類にはいくつかの試みがあるが、そのひとつに同期型 (synchronous communication) と非同期型 (asynchronous communication) へ分類するものがある。例えば、コンピュータを媒介としたコミュニケーションは次の3つのタイプに要約される (表1)。

非同期型コミュニケーション (asynchronous communication) では、e-mail に代表されるように、情報の発信者と受信者が同じ時間を共有する訳ではなく、一方的な情報提供のみで、与えられる情報に対して質問などの反応がない場合もある。ハイパーテキストは現在では一般的になったいわゆるホームページのことで、非同期型コミュニケーションの一部と考えられる。それに対して同期型コミュニケーション (synchronous communication) では、ビデオ会議やチャットに代表されるように情報のやり取りは同時進行

表1 コンピュータ利用のコミュニケーション (Warschauer et al., 2000, p.3)

Feature	Examples	What you can do
Asynchronous computer-mediated communication	E-mail, Web bulletin boards	Write a message for others to read later
Synchronous computer-mediated communication	Chat rooms, Instant messaging, Videoconferencing	Communicate in real time with others who are online at the same time
Hypertext	World Wide Web	Access and publish multimedia documents with clickable links to other documents

時間帯の中でおこなわれる。

これまでのアクティブラーニングの議論では、対面授業に対し、授業外で主として学び授業では理解出来なかった部分を教員に質問する反転授業（例、カーンアカデミーやMOOC）やこの反転授業と従来型授業の混種であるブレンド型授業がその主流であった。しかし、新型コロナウイルス感染症を受け、全面遠隔授業となったため、現在議論の中心は、コミュニケーションの型と類似した授業分類であるオンデマンド型、双方向同期型、混合型に移行している（表2）。

遠隔授業はまず大きくオンデマンド（非同期）型（on-demand）と双方向同期型（synchronous/interactive）に大別される。オンデマンド型では、非同期型コミュニケーションがそうであるように授業ビデオやPowerPointファイルを教員が予め作成し、manabaのようなLMS（Learning Management System）にアップロードして学生が自宅など一般的には教室外で視聴し学習する。授業時間を学習者自身が比較的自由に設定することが可能であることに特徴がある。それに対し、双方向同期型では学習する場

表2 遠隔授業と対面授業の種類

授業の種類	タイプ	例	学習者ができること
遠隔授業	オンデマンド型	パワーポイント配布 授業ビデオ配布 (YouTube、Stream など) LMS (manaba) の活用	時間・場所を選択してビデオの視聴や資料を読むことができる
	双方向同期型	ビデオ会議型 (Zoom や Teams 利用)	授業内に質問をしたり、他の学習者とディスカッションができる
	遠隔授業と対面授業の混合	ハイブリッド型 (対面授業をビデオ会議で中継) ハイフレックス型 (対面授業をビデオ会議を利用して教室内外から参加)	参加する場所を選択することができる
対面授業		伝統的教室内授業	学習者は教員に直接会って授業を受ける

所はオンデマンド型同様、柔軟な選択が可能であるが、授業時間は対面授業の場合と同様、固定される。

同志社女子大学では未実施であるが、新型コロナウイルス感染拡大状況に即した活動レベル基準を定めている大学の中には、対面授業を開始しても不安を抱える学生の為に、Zoom や Teams などのツールを使った対面授業の配信を行うことによる「対面+双方向同期型遠隔授業」の混種 (ハイブリッド型、Hybrid) を提供したケースもあった³。また、今後さらに、混種の自由度を高め、授業「内・外」でもパソコンなどの情報機器から授業に参加するハイフレックス型 (Hybrid-Flexible) も使われることが多くなると予測される。

一気に授業の自由度が高まったことを受け、遠隔授業に関する研究も進められている。例えば、大角（2021）は自身が経験したオンライン授業をもとに Zoom を活用するためのヒントをアクティブラーニングの観点から要約している。また、塚本（2021）は Moodle を LMS として利用することを中核とするオンデマンド型授業の準備の方法と授業実施の工夫点を議論している。しかし、これらはいくまでも教員の立場からの議論であり、遠隔授業について学習者である学生が遠隔授業をどのように認識しているのかについての考察は、Selwood（2021）の研究⁴を除けばまだその実像を見るに至っていない。

したがって、本論では、遠隔授業に対する教員の認識の重要性を認識しながらも、学習者である大学生に焦点を当て、遠隔授業に対する大学生の認識を精査することとする。

これらの研究背景をもとに次の2点の研究課題を設定した。

研究課題（1）遠隔授業に対して日本人大学生はどのような印象を持ったのか

研究課題（2）学習者の特徴（学習スタイル、英語能力、SES⁵）と遠隔授業の印象には関連性はあるか

3. 研究方法

3. 1 概略

関西にある女子大学の学生を対象に、遠隔授業に関する質問紙を開発し調査研究を実施した。

3. 2 質問紙の開発

質問紙作成にあたり、Mackey and Gass（2015）を参照しながら妥当性、信頼性に配慮し、筆者らで構成概念を検討した。その結果、1）調査協力者自身の CALL 教材利用、2）調査協力者自身の総合学習時間、3）遠隔・

表3 質問項目

No.	質問のカテゴリー	質問内容
Q 1	CALL 教材利用	春と秋どちらの方が「より長く」取り組んだか
Q 2	CALL 教材利用	春と秋どちらの方が「より自ら進んで」利用したか
Q 3	CALL 教材利用	春と秋どちらの方が「より学習効果があった」か
Q 7	総合学習時間	春と秋どちらの方が「より長く」取り組んだか
Q 8	課外学習	春と秋どちらの方が「より自ら学習」しましたか
Q 9	課外学習	春と秋どちらの方が「より学習効果があった」か
Q 4	遠隔・対面授業の比較	どちらの方が「より理解しやすかった」か
Q 5	遠隔・対面授業の比較	どちらの方が「より身に付いた」か
Q 6	遠隔・対面授業の比較	どちらの方が「より積極的に」参加したか
Q15	遠隔・対面授業の比較	どちらの方が「より参加しやすかった」か
Q19	遠隔・対面授業の比較	「どちらの方が好き」か
Q10	英語能力の伸張	英語の「リスニング能力」は、春と秋どちらの方が伸びたか
Q11	英語能力の伸張	英語の「リーディング能力」は、春と秋どちらの方が伸びたか
Q12	英語能力の伸張	英語の「スピーキング能力」は、春と秋どちらの方が伸びたか
Q13	英語能力の伸張	英語の「ライティング能力」は、春と秋どちらの方が伸びたか
Q16	通学時間	家を出てから学校に着くまで (door to door) の所要時間
Q14	学習スタイル	「一人で勉強する」方が好きだ
Q17	学習スタイル	「グループで勉強する」方が好きだ
Q18	英語能力の自己評価	同世代の日本人と比較しての自己評価

対面授業の定着度、4) 調査協力者自身の英語能力の伸張、5) 学習者の特徴、の5項目を構成概念とした。質問紙においては、まず、春学期の遠隔授業と秋学期の対面授業を比較しCALL教材の利用について問い、どのように取り組んだかやその学習効果について質問した。次に、総合学習時間(授業と課外学習すべて含む)の取り組み方や学習効果について、春学期と秋学期での変化を調べる設問を設けた。また、春学期と秋学期を比べ英語の4スキル(リスニング能力、リーディング能力、スピーキング能力、ライティング能力)における調査協力者自身の英語能力の伸張について問い、学習者の特徴について問う設問では、調査協力者の学習スタイル(ひとりまたはグループで勉強するのを好む)や通学時間、自身の英語能力の自己評価、春学期の遠隔授業と秋学期の対面授業を比較しどちらを好むのかについて聞いた。最後の4つの設問は自由記述とし、春学期の遠隔授業と秋学期の対面授業における利点と問題点について問う設問をそれぞれ設けた。各設問の回答には自由記述と6段階の間隔尺度(Likert-scale)を利用した(「絶対春学期だと思う」「春学期だと思う」「どちらかといえば春学期だと思う」「どちらかといえば秋学期だと思う」「秋学期だと思う」「絶対秋学期だと思う」または「全く当てはまらない」「当てはまらない」「あまり当てはまらない」「やや当てはまる」「当てはまる」「よく当てはまる」または「絶対遠隔授業」「遠隔授業」「どちらかといえば遠隔授業」「どちらかといえば対面授業」「対面授業」「絶対対面授業」または「30分以内」「1時間以内」「1時間半以内」「2時間以内」「3時間以上」または「とても劣っている」「劣っている」「やや劣っている」「やや優れている」「優れている」「とても優れている」)。質問紙はmanabaにて作成し、調査協力者がmanabaにアクセスし回答する方法を取った。今回の調査は、日本語の質問紙を使用した。

3.3 調査協力者

本研究の調査は、2020年12月16日の9時から12月21日23時59分まで

manaba（通称、マナビー）のアンケート機能を利用して実施された。調査協力者は、英語英文学科開講科目「Career Introduction I」受講の128名で、内4名は調査に参加することを同意しなかった。124名は女性であり、6名を除いては全て1年次生であった⁶。

3. 4 手順

調査協力者へ研究の趣旨、収集した情報の取り扱いを動画で説明し、調査への参加意思は調査協力者の自由意思に任せられることを確認したうえで調査用紙への回答を依頼した。調査協力者は manaba から質問紙へアクセスし、回答した。調査に要した時間は10分程度であった。回収し、128名の回答の中で、調査への参加意思を示した者の回答を有効とし、結果として124名から同意が得られ、SPSS Version 26.0を利用し分析を行った。

4. 結果と考察

4. 1 信頼性と妥当性

まず、質問紙の信頼性を Cronbach's Alpha を利用して算出した。

表4 信頼性 (Cronbach's Alpha)

Cronbach's Alpha	N of Items
0.86	19

Note. $N=124$.

表4が示す通り、質問紙としては妥当な高さの信頼性を確保していることが確認された。

4. 2 記述統計

次に記述統計を示す。質問紙では、6件法の間隔尺度で春学期（遠隔授業）と秋学期（対面授業）のどちらの方がより良かったかを尋ねているため、中間の3.5ポイントよりも数値が小さければ春学期（遠隔授業）を大きければ秋学期（対面授業）を参加者がより好んでいることを示すことになる。

表5 遠隔授業の方が優位であった項目 ($M < 3.5$)

No.	質問内容	Min	Max	<i>M</i>	<i>SD</i>
Q 1	CALL 教材・長く	1	6	2.53	1.36
Q 2	CALL 教材・自主性	1	6	2.87	1.44
Q 3	CALL 教材・学習効果	1	6	3.44	1.45
Q 8	課外・自主性	1	6	3.48	1.43

Note. $N=124$.

表5が示す通り、CALL教材（同志社女子大学ではスーパー英語 Academic Express 3とALC Net Academy Nextが導入されている）に関しては、遠隔授業の方が学習者は取り組みやすい傾向にある。一方、授業自体の理解度や習得度、授業への積極的な参加に関しては対面授業の方が認識が高い。全般的に遠隔授業の方が優位な項目が多い。表6は対面授業が優位であった項目をしめしている。

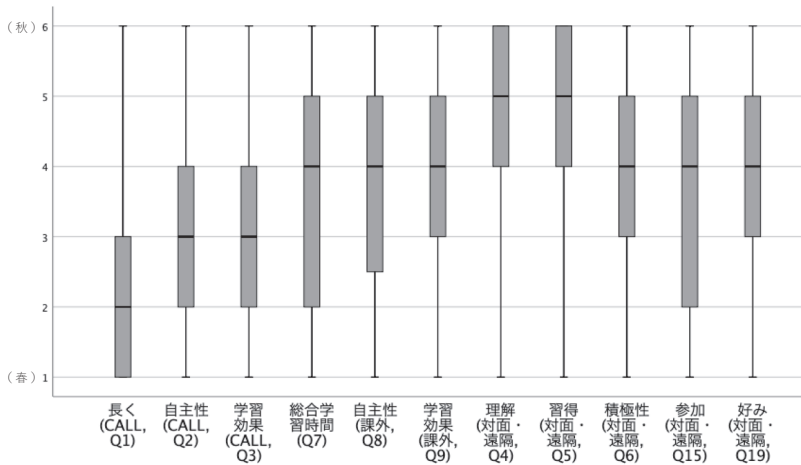
さらに理解を深め、データの分散を確認するために、表5・6の記述統計の結果をBoxplot（箱ひげ図）により示す（図1）。

図1が示すように、理解や習得に関しては75%以上の参加者が対面授業を支持している。一方、CALL教材では遠隔授業の方がより長く取り組んだ。しかし、課外学習に関しては対面授業の方がより学習効果があったとしている（Q9）。全体として対面授業の方が認知度の高い項目が多いが、データ

表6 対面授業の方が優位であった項目 ($M > 3.5$)

No.	質問内容	Min	Max	M	SD
Q 4	授業理解	1	6	4.57	1.29
Q 5	授業・習得	1	6	4.52	1.29
Q 6	授業・積極性	1	6	4.16	1.41
Q19	授業・好み	1	6	3.92	1.56
Q 9	課外・学習効果	1	6	3.92	1.29
Q15	授業参加	1	6	3.81	1.64
Q 7	総合学習時間	1	6	3.76	1.62

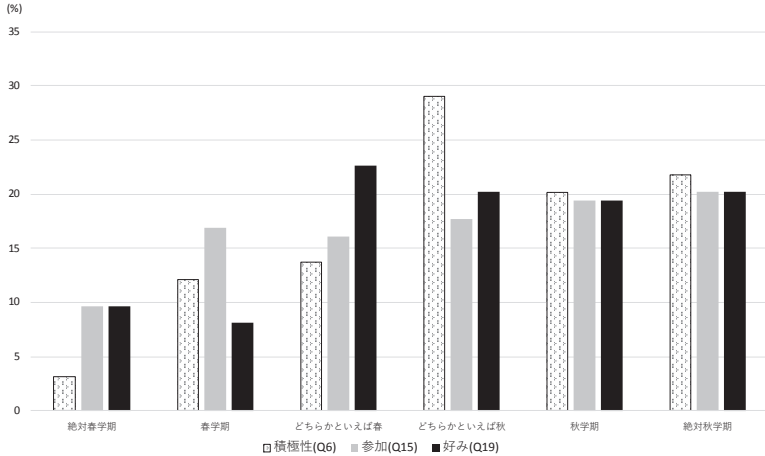
Note. $N=124$.



Note. $N = 124$.

図1 春学期（遠隔授業）と秋学期（対面授業）の比較

の分散が広範囲に渡っている事が示すように、参加者の個人差も大きい。特に広範囲に渡っている授業への積極性（Q6）、授業への参加（Q15）、授業の好み（Q19）を棒グラフで確認してみよう（図2）。



Note. $N = 124$.

図2 授業への積極性・参加・好みの比較

授業の好みは全体としては対面授業（秋学期）を支持するものが多いが、遠隔授業（春学期）に対する強い支持もある（10%弱）。また、授業への参加のしやすさに関しては遠隔・対面授業にほぼ均等な支持があることも注目される。

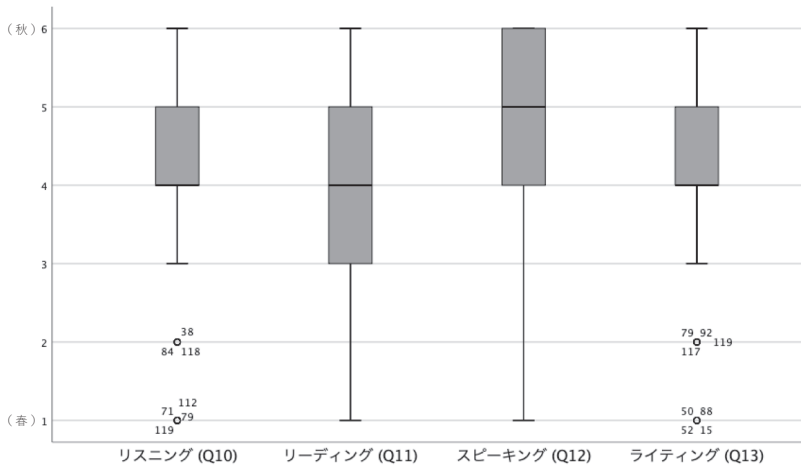
では英語能力の伸長という観点からはどちらの授業タイプが支持されているのだろうか。

表7が示す通り、全体としては対面授業、特にスピーキングに関しては対面授業を圧倒的に指示する参加者が多い。表7の結果をBoxplot（箱ひげ図）でデータの分布を確認してみよう。

表7 英語のスキル伸張に関する春学期と秋学期の比較

No.	質問内容	Min	Max	<i>M</i>	<i>SD</i>
Q12	スピーキング	1	6	4.74	1.18
Q10	リスニング	1	6	4.24	1.37
Q13	ライティング	1	6	4.23	1.29
Q11	リーディング	1	6	4.05	1.23

Note. *N* = 124.



Note. *N* = 124.

図3 英語のスキルに関する春秋の比較

4スキルの伸長に関しては全体的に対面授業が優位である。特に、スピーキングでは75%以上が対面授業を支持している。一方、リスニングとライティングでは全体としては対面授業支持であるが、はずれ値が示すように、数は

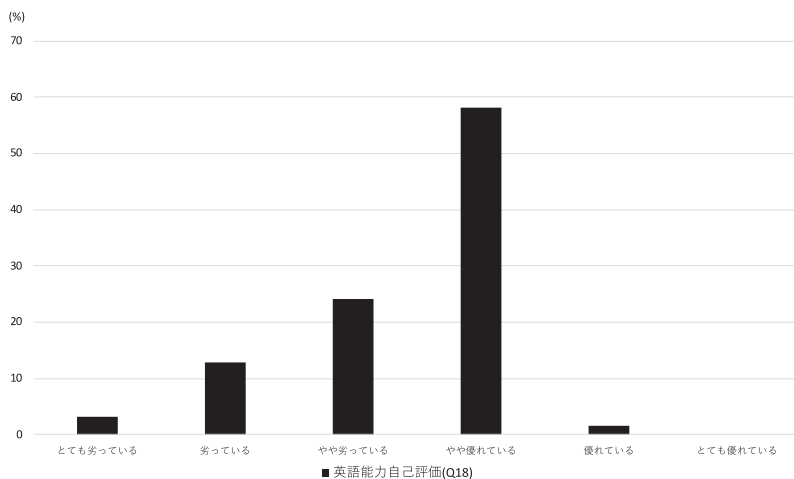
多くないが、圧倒的に遠隔授業を支持する参加者が存在することも注目される。

4.3 相関関係

次に、英語能力（自己評価）、通学時間、学習スタイルと授業のタイプの関係について考察してみよう。まず英語能力の自己評価（図4）と通学時間（図5）の記述統計を棒グラフによって示す。

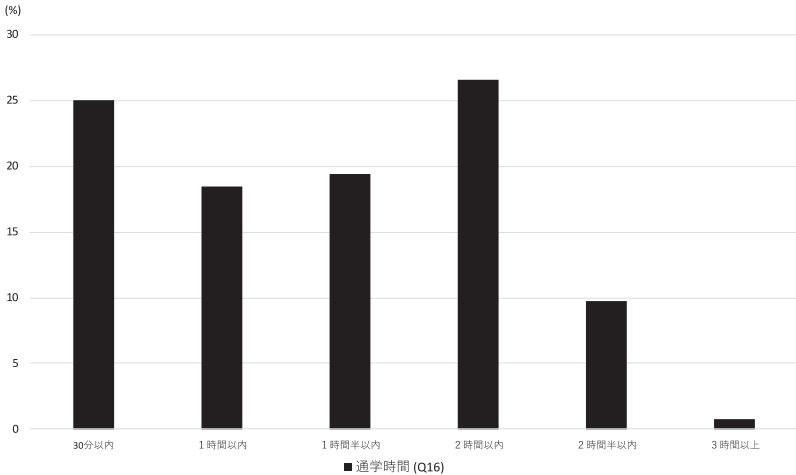
とても優れているとするものはゼロであるものの、全体の60%近くの参加者が同年代の大学生よりも「やや優れている」とするなど、全体的に自己評価は高い傾向にある。

通学時間に関しては1時間から2時間としたものが多かったが、30分以内の者が25%、2時間以上かかる者の割合も10%程度あった。



Note. $N = 124$.

図4 英語能力の自己評価



Note. $N = 124$.

図5 通学時間

次にデータの正規性をコルモゴロフ・スミルノフ検定 (Kolmogorov-Smirnov Test) によって確認する (表8)。

コルモゴロフ・スミルノフ検定の結果、正規性の帰無仮説が棄却されるため、ノンパラメトリック法により、英語能力の自己評価 (Q18)・通学時間 (Q16) と遠隔授業・対面授業 (Q1～9、Q19) の相関関係を Kendall's tau により算出する。英語能力の自己評価 (Q18) に関して最も高い相関係数が見られたのは、授業に対する好み (Q19) $r=0.133$ (n.s.)、一方、通学時間に関しては、遠隔・対面授業の理解度 (Q4) $r=-0.095$ (n.s.) が最も高い相関係数であったが、いずれにおいても有意な相関関係は観測されなかった。クロス集計表からも通学時間が長い参加者の方が遠隔授業を好む傾向にあるとは言えない (表9)。

表8 データの正規性の検定 (Kolmogorov-SmirnovTest) の結果

	Statistic	<i>df</i>	<i>p</i>
Q18	0.35	124	0.00
Q 9	0.24	124	0.00
Q10	0.21	124	0.00
Q11	0.21	124	0.00
Q13	0.21	124	0.00
Q12	0.20	124	0.00
Q 2	0.20	124	0.00
Q 5	0.19	124	0.00
Q17	0.19	124	0.00
Q14	0.19	124	0.00
Q 1	0.19	124	0.00
Q16	0.18	124	0.00
Q 4	0.17	124	0.00
Q 6	0.16	124	0.00
Q15	0.16	124	0.00
Q19	0.15	124	0.00
Q 8	0.15	124	0.00
Q 7	0.15	124	0.00
Q 3	0.14	124	0.00

Note. $N=124$.

表9 通学時間と授業のタイプの好みのクロス集計表（人数）

Q19/Q16	30分 以内	1時間 以内	1時間 半以内	2時間 以内	2時間 半以内	3時間 以上	Total
絶対遠隔授業	4	2	1	2	3	0	12
遠隔授業	2	1	1	3	2	1	10
どちらかといえば遠隔授業	5	9	6	7	1	0	28
どちらかといえば対面授業	4	3	9	8	1	0	25
対面授業	6	5	3	7	3	0	24
絶対対面授業	10	3	4	6	2	0	25
Total	31	23	24	33	12	1	124

Note. $N=124$.

次に、学習スタイルとの関連性を同様の方法によって検討する（表10）。学習スタイルに関する質問は、ひとりで学ぶのを好むか（Q14）、グループ学習を好むか（Q17）の2項目を尋ねている。

CALL教材に関する質問項目に関しては学習者のスタイルは関連性が弱い。一方、遠隔・対面授業に対する好み・参加のしやすさ、また課外学習の自主性・その学習効果において中程度の強さの有意な相関係数が観測された。一人で勉強するのを好む参加者は遠隔授業を、グループ学習を好む参加者は対面授業を指向する傾向にある。例えば、独学の好きな学習者は遠隔授業を好むが故に（負の相関）、課外学習に関しても遠隔授業の方が自主的に取り組み、その学習効果も大きいと予測される。授業と課外学習が密接に関連している点も興味深い。

表10 学習スタイルと遠隔・対面授業の関係（相関係数を示した）

	一人で勉強する (Q14)	グループで勉強する (Q17)
Q 1 CALL 教材（長く）	-0.02	-0.02
Q 2 CALL 教材（自主性）	-0.06	0.03
Q 3 CALL 教材（学習効果）	-0.11	0.00
Q 4 遠隔・対面授業（理解）	-0.18 *	0.19 **
Q 5 遠隔・対面授業（習得）	-0.19 *	0.17 *
Q 6 遠隔・対面授業（積極性）	-0.20 **	0.22 **
Q 7 総合学習時間	-0.19 **	0.23 **
Q 8 課外学習（自主性）	-0.27 **	0.23 **
Q 9 課外学習（学習効果）	-0.22 **	0.26 **
Q15 遠隔・対面授業（参加）	-0.28 **	0.35 **
Q19 遠隔・対面授業（好み）	-0.29 **	0.33 **

Note. $N=124$.

4. 4 研究課題1への回答

研究課題（1）遠隔授業に対して日本人大学生はどのような印象を持ったのか？

授業形態に関する11項目のうち7項目において対面授業の方がより多くの学生に支持されており（表5、6、図1）、好みに関しても参加者の約60%が遠隔授業よりも対面授業に対して肯定的な印象を示した。しかし、CALL教材に目を転じると、春学期の遠隔授業の方が優位な項目が多い。利用時間は春学期の遠隔授業の方が長く（Q1）、CALL教材をより自主的に（Q2）取り組んだという結果になった。もっとも、CALL教材を用いた学習効果（Q3）やその他の課外学習の自主性（Q8）に関しては遠隔授業と対面授業では拮抗している。

遠隔授業に対する自由記述（Q20-23）からは、良い点としては「移動時間が不要であること」、「授業の直前に起きても授業に参加できること」、「講義の録画ビデオを繰り返し視聴できること」、「コロナ感染リスクの心配が減ること」などが挙げられた。大学生ともなると、2時間以上かけて学校に通う学生も少なくはない。そのため、自宅に居ながら授業に参加できるのは遠隔授業のメリットの一つであると言える。また、外に出て電車やバスなどの公共交通機関も利用する必要がなく、コロナの感染リスクや不安も大幅に軽減できる。更には遠隔授業の内、オンデマンド型では毎時の講義を録画収録・配信されるので、都合の良い時間に視聴し、反復学習にも用いることができると参加者はその利点を認めている。

一方、遠隔授業にも問題点はある。授業と課外学習すべて含む総合学習時間になると秋学期の対面授業の方が長く（Q7、表6）、課外の学習効果についても秋学期に軍配が上がっている（Q9、表6）。また、授業の理解度と習得について遠隔授業と対面授業を比較したところ（Q4、Q5）、対面授業の方が優位であるという結果がでた。これらを裏付けるかのように、自由記述では、遠隔授業の問題点として、授業間での質の差、教員や他の学生とのコミュニケーションの取りにくさ、機械トラブル、モチベーション低下などが挙げられている（Q21）。

新しい人との出会いが新生生にとっての楽しみの一つと言えるが、遠隔授業では個人間でのコミュニケーションをとるのは困難である。遠隔授業ではZoomの一機能であるブレイクアウトルームを使って、いくつかのグループに分かれ、少人数でビデオ通話をすることができる。しかし、入学して最初の授業からオリエンテーションもなく友達を作れていない状態で、Zoomでの会話は何を話してよいか分からず気まずかったという回答があった。そのため、授業中に分からない所があってもその場で聞いたり相談したりすることができない。このように、人との直接の交流がないことで遠隔授業では対面授業に比べて積極性が低くなってしまったと考えられる。また、インター

ネットの接続不良や機械トラブルなどが起こることで、学生たちの集中力がそがれるという意見もあった。これも理解度や習得度に影響したと考えられる。同志社女子大学の遠隔授業に関するアンケート調査結果（若本、2020）では全学11学科全てにおいて「遠隔授業は滞りなく行われた」に非常に肯定的な反応が示されているが、授業の質についての意見もあり、授業によっては教員のパソコン操作の不慣れのために授業が進まないという回答があった。

以上のように対面授業にはメリット以上にインターネット環境の整備や機械操作の熟達の必要がある。さらに遠隔授業の最大の欠点は人と人との繋がりが希薄であることである。学生にとって教員や他の生徒とのコミュニケーションが授業内容の理解やモチベーションの維持に非常に大きく影響するとみられた。遠隔授業は便利であり、授業の新たな可能性があるのは春学期の遠隔授業で感じられたが、すべての授業を遠隔で行うには不十分であり対面授業にしかないメリットというのも改めて感じられる機会になった。

4. 5 研究課題2への回答

研究課題（2）学習者の特徴（学習スタイル、英語能力、SES）と遠隔授業の印象には関連性はあるか？

通学時間の長さや遠隔・対面授業に対する嗜好には有意な相関が見られなかったことから、必ずしも通学時間が長いからといって学生が遠隔授業を好むという訳ではないことが伺える。通学時間が1時間以内から2時間以内の学生は全体のおよそ65%を占めたが、そのうちの半分以上が対面授業を支持している。通学時間が2時間半以内という学生も、遠隔授業を支持する者と対面授業を支持する者とで意見が半分に割れていることが読み取れる。今回の質問紙のQ20からQ23の記述回答で、遠隔・対面授業の利点や問題点について尋ねたところ、遠隔授業の利点（Q20）としては、「移動時間がかからないためその時間を他のことに有効活用できること」や「自分の好きなタイミングで授業を受けられる」、「繰り返し講義を視聴できること」などの意見

が見受けられた。問題点（Q21）としては「機械の不都合で授業に参加できなかった事」や「クラスメートとの助け合いや、分からないところを聞きあったりすることができなかつたので一人で悩むしかなかつた」などが挙げられた。対面授業の利点（Q22）としては「友達や先生方と直接話せてコミュニケーションをとれるところ」や「わからなかつたことがあつた時にすぐに聞くことができ、周りの人と協力をしながら学習できること」などの意見があり、問題点（Q23）としては「コロナ感染のリスクがある」や「通学に時間がかかつてしまうこと」などの意見が見られた。

神戸大学の遠隔授業に関するアンケート調査結果（岡田、米谷、2020）では、遠隔授業を受ける上での問題と感じている点について、学生（学部生）は「学習上の問題（長時間オンラインで受講し続けること）」を最も多く選択しており、「人間関係上の問題（友達ができない・相談相手がいない）」、「心理面的問題（不安、孤独感に悩まされる）」が次に多かつたことが示されている。また、遠隔授業への意見・要望などの自由記述欄では課題の量の多さが多くの学生から指摘されていた。ネガティブな面が目立つ反面、遠隔授業か対面授業のどちらを好むかという質問に対しては賛否両論あり、友達と交流することができる対面授業を好む者もいれば、少数であるが遠隔授業をずっとしてほしいという意見もあつたとしている。

このように、学生は遠隔授業の利点を認識しつつも、自宅でひとり授業を受け、頼る人がいなかつたことやインターネット環境の授業への影響など、精神的にも不安な面があつたことが考えられる。対面授業では、友達に直接会つたり話したりすることの楽しみや、遠隔授業では聞くことができなかつた質問をすぐに友達や教員に聞くことができるなど、様々な利点が背景にあつたことが、通学時間が長い学生においても必ずしも遠隔授業を好むという訳ではないという結果に影響している可能性がある。1回生は特に友達がいない状態から大学生活が遠隔でスタートし、春学期は心細く不安な時期を過ごしていたと考えられ、秋学期の対面授業では友達や教員に会い、学校に集う

という楽しみもあったのだろう。

英語能力の自己評価においては、英語能力と遠隔・対面授業に対する嗜好には有意な相関が見られなかった点において、英語能力が高い学習者が対面または遠隔授業を一律に好む訳ではないということがわかる。一方では、同世代の日本人英語学習者と比較して「やや優れている」を選択した参加者がおよそ60%で、参加者の英語能力の自己評価は高い傾向にあったことが、有意な相関が算出されなかった可能性とも考えられる。

通学時間と英語能力の自己評価は共に遠隔・対面授業に関連性が確認出来なかったが、学習スタイルにおいては遠隔・対面授業に対する嗜好と興味深い相関が見られた。ひとりで学ぶのが好きな学習者は一般的に遠隔授業を好み、遠隔授業に意欲的に参加しやすく、対面授業においては参加し難い傾向があるという結果が得られた。一方グループで学ぶのが好きな学習者は、一般的に対面授業を好み、対面授業に意欲的に参加しやすく、遠隔授業は参加し難い傾向にあることが明らかになった。春学期の遠隔授業は、ひとりで学ぶのを好む学習者にとって福音であったが、グループで学ぶのを好む学習者にとっては苦痛であったともいえる。また秋学期の対面授業でも、グループで学ぶのを好む学習者にとって喜ばしいことであったが、ひとりで学ぶのを好む学習者にとってはストレスなどを感じていた可能性もあろう。

パンデミックにより遠隔授業を行わざるを得なかったが、遠隔授業は通学時間を必要としない分、学生にとっては自分の時間を多く持つことが可能であったと考えられる。学生たちは遠隔・対面授業を両方体験したことにより、どちらが自身に合っている学習様式かを知るよい機会を得、学校の外からでも授業を受けることが可能であることを認知した一年であったといえるであろう。

研究結果より、学習者にはそれぞれが好む学習スタイルが存在することが明らかになった。このパンデミックが終息した後も遠隔・対面授業を両方向った経験を活かし、学生の意見を尊重しながら、授業スタイルの多様性を重視

することが必要になってくるといえよう。将来的には、学生が授業スタイルを自ら自由に選択することが可能になるかもしれない。これは大学教育だけに限ったことではなく、これからの小中高等学校を含むあらゆる段階において、児童・生徒・学生が自身のモチベーションを高め、より自律的に学び続けるために、自分自身に合った学習スタイルで学ぶことが必要となる。

5. 結論と研究の限界

5. 1 結論

今回、遠隔授業と対面授業について比較をし、大学生にどのような影響や印象を与えたのかを調査をし、次の4点が明らかになった。

- 1) 学生はCALL教材では遠隔授業の方が取り組みやすいという傾向があった。しかし、授業の理解や習得、学習効果においては対面授業の方が優位という結果が出た。授業の好みに関しても対面授業が優位であったが、遠隔授業を支持する学生も少数ではあるが見受けられた。また、授業の参加のしやすさについても対面授業が優位であったが遠隔授業にも一定の支持があった。
- 2) 全体的に対面授業の方が認知度の高い項目が多く見受けられたが、遠隔授業に対して学生は録画された講義を繰り返し視聴することができる点など好印象を抱いていることが明らかとなった。一方、遠隔授業の問題点においては、機材トラブルなどが挙げられ、学生は遠隔授業の利点に気づきつつも対面授業の良さにも学生は多く気づいたといえる。
- 3) 学生の通学時間や英語能力の自己評価に関しては、遠隔・対面授業に関連性がなかったが、学習スタイルと遠隔・対面授業に対する嗜好においては強い相関が見られた。ひとりで学ぶのが好きな学生は、対面授業は参加し難いが、遠隔授業は意欲的に参加しやすく、好む傾向が見受けられた。反対にグループで学ぶのが好きな学生は、遠隔授業は参加し難いが、対面授業は意欲的に参加しやすく、好む傾向が明らかになった。

- 4) 学生たちには自身に合うまたは好む学習スタイルが存在することが研究結果から伺える。大学教育の将来においては、従来の対面授業だけでなく、このパンデミックを通して経験した遠隔授業も引き続き取り入れ、学生のニーズに合わせて柔軟に授業形態を変えていくことが期待される。

5. 2 研究の限界

本研究は大学1回生を対象としたものであり、新入生にとっては新しい環境やシステムに対する期待や不安などが上級生よりも強いと考えられる。そのため、1回生以上の学生を対象に調査を行えば、異なった傾向がみられる可能性もある。同様のことは専攻や性別（今回の参加者は全て英語英文学科の女子大学生）に関しても当てはまる。また、遠隔授業にはオンデマンド型の授業と Zoom や Teams などを使った双方向同期型の授業があったが、今回は細分化して調査することができなかった。今後の研究では更にこの点についても議論を深めることが望ましいだろう。

6. 今後の方向性

歴史的な事象を正確に認識することはその渦中にあるものにとっては難しいものである。今でこそ17世紀に流行したペストや20世紀初頭のスペイン風邪によるパンデミックは歴史的な事実として冷静に理解できるが、その時代を生きた人達はその原因すらわからず右往左往したことだろう。COVID-19はそのDNA構造が割と早く解明されたことによりRNAワクチンも通常よりは早期に開発されたが、現時点ではCOVID-19自体の収束の見通しは立たず、教育界に対する影響もいつまで続くのか誰にも見当がつかない。しかし、ペストによって2年間ケンブリッジ大学が休校になったことにより、アイザック・ニュートンは塾考する時間を得て微分積分を発明したように、教員にとってもこの新型コロナウイルス感染症による影響は悪い事ばかりではなかった。長年教師をしているといわゆるマンネリに陥り自分の授業スタイルを変えることは

なかなか難しい。史上最大の FD とも形容されることがあるが、対面授業が不可能になったことにより、小学校から大学に至るまですべての教員がこれまでの授業を振り返り、いわばこれまでの「授業の棚卸し」（若本、2020）を行なったのがこの2020年だったのではないだろうか。ただ、そのまま授業を棚に戻してはもったいない。よく言われるところの「With コロナ」という意味ではなく、「New Normal」という意味合いでもなく、この1年間の知見を今後の教育に生かしたい。せつかく手に入れた新しい教育手段である遠隔授業を従来の対面授業とどのように組み合わせることができるか。遠隔授業の効果・問題点は何か。遠隔授業と対面授業の組み合わせ方、より効果的な授業の探求、これらは2020年代の教育界の重要な行動計画になるであろう。ただし、これは個々の教員の取り組みでは対応すべくもなく、アカデミック・共同体としての大学としての組織的な取り組みによって進めていかなくてはならないものである。本研究が示唆するように、学習者のスタイルと遠隔・対面授業の好みは関連している可能性が高い。遠隔授業を対面授業と上手く組み合わせることによって、従来から批判されてきた画一的教育から脱皮する絶好のチャンスになると考えるべきであろう。小中学校では2021年から GIGA スクール構想が実行段階に入る（文部科学省、2021）。大学においても、教員・学生の考え方が柔軟になった今だからこそ、ビジネス界でよく言われるところのデジタル・トランスフォーメーション（DX）もツールに加え、高度で質の高い授業を実現する現実的方策を議論する時なのであろう。COVID-19は全世界に災厄をもたらしたのは確かであるが、これまでの因習から脱皮するための未来の教育へのヒントも置土産としているのかもしれない。

参考文献

- Lightbown, P. M., & Spada, N. (2013). *How languages are learned*. Oxford University Press.

- Mackey, A., & Gass, S. M. (2015). *Second language research: Methodology and design* (Second ed.). Routledge.
- 文部科学省. (2021). GIGA スクール構想の実現について. Retrieved from https://www.mext.go.jp/a_menu/other/index_00001.htm
- 岡田彰宏, 米谷淳. (2020). 神戸大学の遠隔授業に関する学生アンケート調査結果について (第46回神戸大学長定例記者会見資料 1) <https://www.kobe-u.ac.jp/documents/info/usr/press/20201127-01.pdf>
- 大角玉樹. (2021). オンライン講義におけるアクティブラーニングの試み: コロナ禍における教育のデジタルイノベーションと講義デザイン. 『琉球大学経営研究』, 1, 50-59.
- Selwood, J. (2021). To Zoom or Not to Zoom: Privacy Concerns and Students' Attitude Towards Interactive Online Learning. *Hiroshima Studies in Language and Language Education*, 24, 73-88. <https://doi.org/10.15027/50448>
- 塚本充. (2021). オンデマンド型講義の準備と実施について. 『福井大学教育・人文社会系部門紀要』, 5, 193-206. <http://hdl.handle.net/10098/00028598>
- 若本夏美. (2020). 私の遠隔授業オンラインセミナー: 遠隔授業が変わる! 遠隔授業で変える! LMS 活用インタビュー第4回. 朝日ネット https://manaba.jp/case_study/8487/
- 若本夏美. (2020). From a passive to an active course evaluation. 2020年度春学期授業に関するアンケート総評 https://www.dwc.doshisha.ac.jp/application/files/8416/1101/9297/questionnaire_sohyo2020sp-2.pdf
- Warschauer, M., Heidi, S., & Meloni, C. (2000). *Internet for English teaching*. TESOL, Inc.

謝 辞

本論文は2020年度同志社女子大学文学研究科開講科目「英語学習者論」の授業での議論を発展させたものである。

質問紙の回答にご協力頂いた「Career Introduction I」受講の同志社女子大学英語英文学科1年次生計100名の学生諸姉に感謝申し上げます。

注

- 1 本論では遠隔授業とオンライン授業を同意として認識し、表記上の容易さから、一貫して遠隔授業と表記する。
- 2 厳密には秋学期においても、教室の容積率が50%を超えるいわゆる大人数が受

講ずるコースは遠隔授業（オンデマンド型）とすることが大学当局から要請された。英語英文学科1年次開講科目においては、「Career Introduction 1」「イギリス文化入門」「言語コミュニケーション入門」の3科目が秋学期も遠隔授業となった。

- 3 京都地区では京都大学がこのハイブリッド型授業の提供も行っていた。京都大学はTA (Teaching Assistant) のトレーニング、配置、教員に対する講習など全学体制での新型コロナウイルス感染症対策に早期に対応していたことが注目される。
- 4 Selwood (2021) は日本の国立大学生246名を対象に、Zoom によるオンライン授業によって大学生が自身のプライバシーが侵害されたかどうかについて調査研究を行っている。
- 5 SES: Socio Economic Status. 本研究では具体的には通学時間を指す。
- 6 6名の内訳は、4年次生1名、3年次生1名、2年次生4名。

付録

遠隔授業と対面授業に関する質問紙

(© Erika Kim, Keiko Morikawa, Natsumi Wakamoto, 2020)

この質問紙は、この春学期実施された遠隔授業と秋学期に主として行われている対面授業に関して皆さんの考えを調べるために研究用に開発されたものです。収集したデータは研究目的のためだけに使われ、個人情報厳守のもと、データ処理後は破棄いたします。また、回答は成績とは無関係です。あまり考えすぎず、思った通りお答えください。参加は個人の自由意志に任されています。また、どの時点でも参加を撤回することができます。この質問紙は23項目で構成されています。各指示文・項目をよく読み、回答漏れがないように気をつけてください。最後に記載されている同意書には、必ずどちらかにチェックを入れてください。

同志社女子大学文学研究科英語・英文学専攻	1年次生	金 衿佳
同志社女子大学文学研究科英語・英文学専攻	1年次生	森川慧子
同志社女子大学文学研究科	教授	若本夏美

Super English とアルクについて質問します。

- Q 1. 春学期と秋学期を比べると、どちらの学期の方が「より長く」取り組みましたか？
- Q 2. 春学期と秋学期を比べると、どちらの学期の方が「より自ら進んで」利用しましたか？

- Q 3. 春学期と秋学期を比べると、どちらの学期の方が「より学習効果があった」と思いましたか？
- Q 4. 春学期の遠隔授業と秋学期の対面授業を比べると、どちらの学期の方が「より理解しやすかった」ですか？
- Q 5. 春学期の遠隔授業と秋学期の対面授業を比べると、どちらの学期の方が「より身に付いた」と思えますか？
- Q 6. 春学期の遠隔授業と秋学期の対面授業を比べると、どちらの学期の方が「より積極的に」参加しましたか？
- Q 7. 春学期と秋学期を比べると、総合学習時間（授業と課外学習すべて含む）はどちらの学期の方が「より長く」取り組みましたか？
- Q 8. 春学期と秋学期を比べると、課外学習はどちらの学期の方が「より自ら学習」しましたか？
- Q 9. 春学期と秋学期を比べると、課外学習はどちらの学期の方が「より学習効果があった」と思いましたか？
- Q10. 春学期の遠隔授業と秋学期の対面授業を比べると、英語の「リスニング能力」はどちらの学期の方が伸びたと感じましたか？
- Q11. 春学期の遠隔授業と秋学期の対面授業を比べると、英語の「リーディング能力」はどちらの学期の方が伸びたと感じましたか？

- Q12. 春学期の遠隔授業と秋学期の対面授業を比べると、英語の「スピーキング能力」はどちらの学期の方が伸びたと感じましたか？
- Q13. 春学期の遠隔授業と秋学期の対面授業を比べると、英語の「ライティング能力」はどちらの学期の方が伸びたと感じましたか？
- Q14. 一般的に私は、「一人で勉強する」方が好きだ。
- Q15. 春学期の遠隔授業と秋学期の対面授業を比べると、どちらの方が「より参加しやすかった」ですか？
- Q16. 家を出てから学校に着くまで (door to door)、平均でどれくらいかかりますか？ (最も近いところを選んでください)
- 30分以内
 - 1時間以内
 - 1時間半以内
 - 2時間以内
 - 2時間半以内
 - 3時間以上
- Q17. 一般的に私は、「グループで勉強する」方が好きだ。
- Q18. 私の英語能力 (全般的) は、同世代の日本人と比較して・・・
- とても劣っている
 - 劣っている
 - やや劣っている
 - やや優れている

優れている

とても優れている

Q19. 春学期の遠隔授業と秋学期の対面授業を比べると、「どちらの方が好き」ですか？

Q20. 遠隔授業について、あなたが良いと思ったことは何ですか？

Q21. 遠隔授業について、あなたが問題だと思ったことは何ですか？

Q22. 対面授業について、あなたが良いと思ったことは何ですか？

Q23. 対面授業について、あなたが問題だと思ったことは何ですか？

同意書

私は、この研究に参加することに、

同意する

同意しない

提出ボタンを押し忘れないようにしてください。

質問は以上で終わりです。

ご協力ありがとうございます。